

<ポスト冷戦研究会報告>

「2000年代における近代（工業化）の成熟と課題」

－危機論・世界観の再構成を展望して－

久保 新一

はじめに

1. 課題：直面する危機＝文明危機、

体制（資本主義）危機論は発展段階論＝進歩史観[30]、90年代社会主義崩壊で破綻。2000年代、近代（工業化）の成熟、先進工業国の産業基盤空洞化・グローバル化、地球環境問題（外的自然破壊）の深化・主体（内的自然劣化）の解体。近代主義破綻。

「再帰的近代化」論[1]、「歴史の危機」論[2,3]

危機論、世界観の再構成（体制危機論→文明危機論、機械論的世界観→生命論的世界観）の必要

2. 方法：

1970年代以降、経済社会の技術的基盤に従来の工業（機械）とは違う原理を持つハイテク製品（ME・IT、原発）が入ってきた。両者の接合は、経済社会のあり方を大きく変えるが、社会科学はその変化を理論的に十分受け止めえないまま、従来の枠組みの線上で現実を分析してきた。その結果、社会が現在直面している危機を理論的に認識しえず、変革の展望も持てないまま行詰っている、とはいえないか。70年代以降の現代社会を分析する視角を提起し、現状分析と展望を示すことを試みたい。

・工業化の成熟と文明危機の分析視角

(1) 冷戦体制解体過程の「ダイナミズム」論[4,5]

① 戦後冷戦体制下における米ソ両基軸国の冷戦戦略兵器（核とミサイル）開発競争を通じて、20世紀物理科学革命（量子力学）の成果は技術化され、生産力化された。冷戦の力学なしにME・IT革命の展開はなかった[4,6,24,101]。

②冷戦（軍需）の論理によって創出された戦略兵器開発（R&D型）産業は、内側から冷戦基軸国・アメリカを崩す一因となり、デタントによって技術（モノと人）を民需に解放する。解放された技術は未成熟で研究・開発（R&D）の継続を必要とした。R&Dという不安定要素を抱えこんだ資本は、R&D主導型産業化[21]し、生産拠点をアジア的地盤に移し、新たなダイナミズムを生み出すと同時に、欧米先進工業国中心の近代の基盤を掘り崩し、文明危機を帰結する。

(2) 近現代の技術・生産力基盤

①機械（重化学工業、古典力学の応用）[21]（19世紀後半－60年代）

②ハイテク（ME革命・70－80年代、IT革命・90－2000年代、量子力学の応用）[21,24]

①②の接合＝自動化・システム化（機電複合システム[21]）、科学技術（数値（0-1）で全てを制御するシステムの成熟（完成）

(3) 文明危機

①地球環境問題（外的自然破壊・システムのツケ）

②主体の解体（内的自然破壊・システムの奴隷）

I 工業化の歴史

1. 近代・工業化（欧米先進工業国）の歴史

(1) 軽工業（繊維工業）期（産業革命－19世紀後半）

機械体系（作業機・伝動機・動力機）と機械制大工業（英、典型）の成立

(2) 在来重化学工業期（19世紀末－1960年代）

- ①19世紀末；鉄道建設と鉄鋼船建造を契機に、欧米先進工業国で内陸資源立地型（軍機の自立目的。独・ルール工業地帯、米・中西部、典型）で成立。
- ②1920年代アメリカ、耐久消費財（自動車・家電）の大量生産体制（ベルトコンベア（アメリカ的生産）システム）成立、1950-60年代先進工業国で展開。

## 2. 日本と東アジアの工業化

### (1)戦前の工業化

明治維新(1868年)；富国強兵・殖産興業政策、日清・日露戦争期（19世紀末-20世紀初頭、官営八幡製鉄と軍工廠での工作機械製造）に成立、①繊維工業段階、②戦時重化学工業化(1931-45年、鉄鋼生産750万トン)で破綻

### (2)戦後重化学工業化

中国革命（49年）、ドッジライン（1\$=360円）、朝鮮特需(50-53年)を経て、高度成長期（1955-70年）に「新鋭」重化学工業として成立

- ①「新鋭」重化学工業；19世紀末に「内陸資源立地型」で成立した欧米「在来」重化学工業の定型（軍機の自立）を破る、冷戦の対中「前進基地」として、米から導入の新技术と世銀借款により、海外資源依存臨海立地型「新鋭」重化学工業として一挙的創出（東アジア NIES（韓・台）・中は戦後日本型を導入）。
- ②60年代後半ヴェトナム特需で、70年アメリカを貿易赤字国に転落させ(70数年ぶり)、71年金ドル交換停止、69年デタント路線への転換・73年石油危機と合わせて、冷戦体制解体に導く。

### (3)ME化・ハイテク化(70-80年代)

71年ドル・73年オイルの両ショックで構造不況、ME革命を軸に「重厚長大」から「軽薄短小」（ハイテク）へ転換

- ① 日本的経営を地盤として「新鋭」重化学工業とME(制御装置)を接合、自動化・ロボット化を達成（80年代初頭、世界のロボットの80%を保有）
- ② 日本的（リーン）生産方式（20年代アメリカ的生産方式を超える）の成立（新単位革命；精度、ミリ→ $\mu$ ,  $s\mu$  単位へ、不良品発生率1-2%→0.0001%へ）, 「Japan as No. 1」\*70年代以降ME革命により電子顕微鏡・望遠鏡等、観測・計測機器の飛躍的進歩（極大（宇宙）と極微（原子）の世界、地球、生命世界の科学的認識が可能になる）
- ③ 大量生産-大量消費-大量廃棄体制（80年代半ば、ゴミ排出量急増）成立  
\*地球環境問題の出現（89年、フットプリント1を超える）

### (4)IT化・デジタル化（90年代）

89年天安門事件、ベルリンの壁、91年ソ連邦解体、ソ連東欧社会主義崩壊、インド開放体制(91年)・中国改革開放体制(92年)転換、冷戦体制解体過程・II（90-2000年代）[6]

- ①ソ連・東欧社会主義崩壊→米一極支配体制（日・長期不況、独・東西統一）  
軍事優先（NSC）→経済優先（NEC）

ポスト冷戦政策(93)＜

高度情報化(93)・ドル還流(95)政策

### ②IT革命

冷戦終了により、IT（インターネット）の民需解放（93年）、ケイタイ解禁（94年）ウインドウズ95(95年)でIT革命、アメリカの復権、全世界のネットによる包摂・システム化

- ③中国・インド（BRICS）台頭 → 米産業「空洞化」・II、先進工業国産業「空洞化」

## 3. 2000年代における工業化の成熟・グローバル化

米ITバブル破綻(00)、9・11(01)、金融危機(08)、EU財政金融危機(09)、日本原発

危機(11)、デトロイト市破産 (13) [102,103,104]

・工業化の成熟：

(1)デジタル化 (2000 年)；複数電子機器 (コピー機、スキャナー、プリンター、現像機、FAX、CD コピー機) の統合 (モジュール化)

①販売額 100 万円→2 万円 (1/50、コモディティ化)、②品質差消失→日本企業凋落  
③海外 (中国) 生産へ[19,20,126]

(2)ICT 化(2000 年)、スマホ化 (2010 年)；通信革命 (ADSL→光→無線)、ケータイ・ネット・コンピュータの統合

①通信速度・容量 (10 年で 1000 倍、画像・動画・双方向通信)、②通信コスト低下 (60 年代の 1/100、定額化)、③64 年 IBM360-40(8000 万円)がスマホ(8 万円、1/1000)

④都市型産業 (新聞、雑誌、書籍、映画、TV、音楽、商業) 衰退、⑤グローバル化

(3) 基本的素材=鉄鋼のコモディティ化

中国躍進 (GDP 世界第二位 (2010 年)、粗鋼生産 1.2 億トン(00)→7 億トン(2013 年))

(4)基本的生産手段=工作機械のコモディティ化

①工作機械 (レーザーカッター(400 万円) →40 万円、1/10)、②3D プリンター (1000 万円の 3D の CAD ソフト→10 万円、1/100)、③プリンテッドエレクトロニクス (iPAD 配線、プリンターで印刷)

\* 機械に制御装置が接合されて自動化、デジタル化で製品統合化、ネット化で産業統合化・グローバル化。ソフトはパッケージ化により完成 (完成するとコピーで価格破壊)。研究・開発も省力・省エネ型で雇用減に帰結。(人体の加工 (iPS 細胞) が「課題」に、)

\* 工業化の成熟は、再生可能エネルギー技術を生み、産業革命以来の化石燃料依存に代わるエネルギー源を創出。

・グローバル化；2000 年 IT バブル崩壊—2008 年金融危機で米一極支配体制終焉、中国・インド他新興国台頭によりグローバル化 (西洋の世界化 (近代の完成))

4. 先進工業国支配 (近代国民経済) 体制崩壊[1,2,6]

新興国 (中・印) 台頭により、工業を基盤として発展してきた欧米・日先進工業国の支配体制崩壊 (産業空洞化・都市型産業破綻) [103]

中間層の解体、失業増、不安定雇用化、福祉体制破綻[104]、極右増[1]

\* 70 年代以降、ME 化・IT 化に伴う零細農耕地盤の東アジア諸国・地域の台頭が、近代小農地盤・在来重化学工業基盤の欧米国民経済 (市民社会) を崩壊させ、同時に自らも破綻の危機を迎えることになる。

5. 地球環境問題・II (CO<sup>2</sup> 400ppm 超)

近代・工業化の成熟→地球環境問題を激化 (外的自然破壊・内的自然破壊帰結) [123,124]

①グローバル化 (文明社会 12 億人→37 億人) →温暖化・異常気象激化 (IPCC 報告 5)

②ネット化・システム化→人間の奴隷化 (主体の消滅)、劣化[1,2,75-80,111]

③工業化；人間自体の改造 (身体=時代遅れのハードウェア) 人工化 (人造人間化) に向かう。「人間とは何か」 [115]

<論 点>

(1)70 年代以降の経済法則；60 年代までの線形 (必然性論) に対し、線形+確率論 (ゲームの理論、FT)。量子力学 (不確定性原理) は、哲学・思想、芸術、人文・社会科学にも大きな影響力を与える [111-117]。R&D は、I=O 関係を崩し、流動化・不安定化[97-100]。

(2)機械+制御装置 (ME・自動化・デジタル化)；①工業化の完成 (生産→消費中心)、②熟練工の解体 (プロレタリアートの消滅)、③近代国民経済 (諸国家の体系) 崩す[111]

(2) 社会主義；近代二元論 (人間-自然)、理性主義、科学主義、単層的理解の産物で無

意識、身体、共同体等人間の持つ多面性・多層性の理解が欠如。近代のポジ（自然の圧倒的支配からの解放）全面化、ネガを軽視。60年代までの在来重化学工業基盤（必然性論）の上での展望[96,111-117],119,120,125-127]。

- (3) 主体；自立した個人（市民）＝（禁欲・勤勉・勤労の成功壮年モデル）[119-122]とプロレタリアート（無産工場労働者）、70年代以降、生産中心→消費中心、ME・自動化と情報化・管理社会化（システム化）により消滅[111,115,116]、若者；流動化・不安定化により保守化、多面的自我（老人の自我（ユング））[96,119-122]へ

## II 文明の転換に向けて

### 1. 人間が自然を支配し利用する近代機械文明の破綻・終焉

単に再生可能エネルギー利用の地域自立型経済社会への転換（内橋、金子[106,107]）ではない。（人間観、世界観の転換が不可欠。）

- (1)機械・人工世界と人間・生命世界の矛盾激化。機械・人工世界の原理は、①効率化（時間の短縮）、②均一化・単一化。人間・生命世界は、①自然時間、②進化・歴史性、③多様化を原理とし、全て合理性（数値(0-1)）で制御される機械・人工世界とはなじまない。
- (2)欧米先進工業国（西洋）に代わり日本・東アジア諸国・地域（東洋）が主導する世界になる（スティグリッツ）ともいえない。東アジア諸国・地域；高自殺率、非婚増・出生率低下、若者が「心の問題」を抱え[96,121]、成長・発展を基調とする近代の人間観、世界観では解決できない問題に直面している。

### (3)現代若者論

格差、様々な将来不安、心の病を持つにもかかわらず、「現状に満足」「現在幸せ」と思っている若者が多く現状肯定的[79,121,122]。（60年代の若者・現状否定的。）

- ① 将来に希望が持てない[79]。②社会の流動化[121]、③イデオロギー（ユートピア）解体により「心の問題」を抱える[96]。④動物園化（内田）、⑤カプセル化[75]、⑥人間の劣化[80]、

⑦（成熟社会の）新しい主体[43]（2000年代、特に3.11以降、中山間地にIターンし自給農業、共同体の復活を目差す若者増[108,110]。）

\* 地球史 46 億年、生命史 40 億年、人類史 700 万年、現人類史 20 万年、文明史 1 万年、近代史 200 年の中で、都市化し人工的環境化したのは、60年代以降の 50 年間。この急激な環境変化が人間に及ぼす影響についてはまだ未解明。原野で育った動物と、動物園で生まれ育った動物を同一視して良いか。

\* 近代科学は、成長・発展・進歩史観（機械論的世界観）に立脚し、それを再生産している[96]。モノが溢れる中で生まれ育ち、イデオロギー（ユートピア）の崩壊を知った若者たちの「心の問題」を解決し、将来展望を開くためには、人間とはなにかを問い直し、新しい人間観・世界観を提起する必要がある。

### 2. 人間観・世界観の転換に向けて[38,80]

#### (1)近代二元論（機械論的世界観）[49,111]

人間と自然、脳と身体[88]、主体と客体→ 理性・合理主義（要素還元・機械論的）[58]

①二元論的接近；科学技術の急激な発展実現、工業化・都市化・システム化推進、「便利で快適、効率のかつ合理的な社会」実現

②部分合理性の集積 → 自然・生物・人間は合理性（数値(0-1)）に還元できない要素を含む→地球環境問題（環境・主体破壊）を帰結[117]

#### (2)科学技術の発展[22-27, 84, 93]と限界

①自然科学（20世紀物理科学革命（相対性理論・量子力学）[23-25, 84, 97-100]

量子力学を手がかりに生命世界の科学的研究が発展。分子生物学（53、DNA 二重らせ

ン構造発見) [49, 84]—遺伝子操作(70 年代)—生命科学 (80 年代) [48-51]、人間、生物と DNA を共有する進化の産物。自然の一部。心身一体としての人間理解 (身体の「自己」 [63])。

- \* 生命の原理 (法則) : DNA は生命の設計図ではない。ゲノム [84, 86] 段階で相互の関係によって役割が決まる関係決定論 (要素還元論とは異質)。進化 (歴史性) と多様化。「種の起源」 [87]→「個体の起源」 [33]→「生命の起源」 [67] が解明され、地球史・生命史との関連で人類史・文明史の位置づけが可能に。「唯物史観」は、生命史 (DNA 共有・人類史 (共通の祖先から分岐) との関連で再構成する必要 [125])。
- \* 個体 ; 複数の生命の共同体として発生。関係によって個が生まれる [30, 33]。共同体の解体によって生まれた個を主体に市民社会が形成される、とした近代市民社会論の限界。

\* 自然科学の限界

- ・量子力学 : 不確定性原理 (「光の二重性」 ; 「物理的実在はある」 (アインシュタイン) 「何を語りうるかだけ」 (ボーア)) 古典力学と量子力学 (原子以下の量子の支配する世界の法則) の世界は根本的に異なる。後者では「因果律」は成立しない。「コペンハーゲン解釈」 (統一理論の未成立) [96-100]

- ・宇宙論 : 宇宙に存在する物質の 4% しか存在が解明されていない。残りは暗黒物質と暗黒エネルギーで、全く不明 [98]。宇宙の起源はビッグバン、といわれているが、その先は不明。

- ・人間論 : 統体としての人間 (生命現象 ; 生・死、感情・心) について未解明 [118]。(身体を対象としてみる二元論的 (科学的) 視角の問題)

- ・近代科学 : キリシヤ哲学の原子論を中世キリスト教の人間理解 (被造物全体を管理・支配する存在として (神に似せて) 人間を作った) を経由して引継ぎ、デカルト・ニュートンの二元論として成立。 [52, 54]

② 人文・社会科学 (哲学、人類学、社会学、経済学)

- ・マルクス主義も近代主義も、近代社会は人間は進歩するという大きな物語を基礎になりたってきた。「技術的進歩に固執したことが地球の荒廃を招いた。」 [96, 111, 115]

- \* フランシス・フクヤマ ; マルクス主義の死 = 歴史の終わり (『歴史の終わりと最後の人間』 (1992 年)) [116]

- \* スチュアート・シム ; テクノサイエンスで計画される歴史の終わり (『デリダと歴史の終わり』 (2006 年)) [115]

- \* フランス現代思想 ; 近代批判、二元論の「脱構築」 (無意識の研究) [111]

- \* フランクフルト学派 ; 主観哲学→相互主体哲学 (ハーバーマス) [26, 27, 112]

- \* 相互主体哲学 (ハーバーマス) →自然との相互主体哲学 [26, 27, 80]。生命は DNA を共有。チンパンジーと人間の DNA は 3% しか違わない。現世人類 (ホモサピエンス) は共通の祖先から分岐・多様化 [24, 30]

- \* 臨床の知 ; 文化人類学、精神分析 (フロイト・ユング・河合隼雄) による人間理解の深化 [96, 119-122]

(3) 生命論的世界観 (生命の原理・法則主導) [49, 58, 59, 64, 85]

① 地球史—生命史—人類史・統合 [47, 49-51]、共同体と個人との関係の見直し [30, 80-82] 心身の統一 [63-65, 88]、生命 (DNA を共有) 史、人類 (共通の祖先 = ホモサピエンスの末裔) 史の線上で「唯物史観」の再構成 [125]

③ 人間は自然の一部、人間と自然の相互主体的社会への転換、近代 (工業) は自然との循環の一局面に包摂 [80]

- ④ 地域の資源・エネルギーを基盤とする社会（再生産構造）の形成[90,109,110]
- ⑤ 自立した個人が社会的分業を担い商品交換を通じて結びつく市民社会（市民革命）から、地域（自然）を基盤とする共同体内で個人が多様な役割を担う、互酬原理を基調とし市場原理、計画原理による百姓社会（百姓革命）へ[105・110]

<参考文献>

1. 宮台真司『私たちはどこから来て、どこへ行くのか』幻冬舎、2014年2月
2. 水野和夫・大沢真幸『資本主義という謎ー成長なき時代をどう生きるかー』NHK出版、2013年2月
3. 水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書、2014年3月
4. 南 克己「アメリカ資本主義の歴史的段階ー戦後＝冷戦体制の性格規定ー」『土地制度史学』第47号、1970年4月
5. 久保新一『戦後世界経済の転換ーME化・NIES化の線上でー』白桃書房、1993年
6. 同・『戦後日本経済の構造と転換ーIT化・グローバル化を超えてー』日本経済評論社、2005年7月
7. ロバート・B・ライシュ『暴走する資本主義』東洋経済新報社、2008年6月
8. 内山節『新・幸福論ー近・現代の次に来るものー』新潮新書、2013年12月
9. スティーブン・ハリス『壊れゆく地球、気候変動がもたらす崩壊の連鎖』講談社、2009年2月
10. ハイディ・カレン『ウェザー・オブ・ザ・フューチャー』シーエムシー出版、2011年9月
11. 田近英一『地球環境 46億年の大変動史』化学同人、2009年5月
12. 高橋 裕『川と国土の危機ー水害と社会ー』岩波書店、2012年9月
13. ウルリッヒ・ベッグ『危険社会ー新しい近代への道ー』法政大学出版局、1998年
14. ウルリッヒ・ベッグ『世界リスク社会論ーテロ・戦争・自然破壊ー』筑摩書房、2010年9月
15. ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン 上・下』岩波書店、2011年9月
16. 小柳義夫「スーパーコンピュータの歩み」『岩波講座・計算科学、No.2』岩波書店、2012年3月
17. 水島宣彦『情報革命の軌跡』裳華房、2005年8月
18. 神保哲生『ネット社会の未来像』春秋社、2006年
19. 湯の上隆『日本型モノづくりの敗北ー零戦・半導体・テレビー』文春新書、2013年10月
20. 吉岡斎編『日本の科学技術ー世紀転換期の社会史ー1995ー2011年』原書房、第1巻、2011年9月。
21. 同・第2巻、2012年2月
22. 経産省・厚労省・文科省『2013年版、ものづくり白書』2013年7月
23. 松井孝典『宇宙誌』岩波書店、2009年10月
24. 村上陽一郎『科学の現在を問う』講談社、2000年8月
25. トーマス・クーン、中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房、1980年
26. ユルゲン・ハーバーマス『イデオロギーとしての技術と科学』平凡社、2000年10月
27. 同・『史的唯物論の再構成』法政大学出版会、2000年10月
28. 有井行夫・長島隆『現代認識とヘーゲル＝マルクス』青木書店、1995年12月
29. 竹田青嗣『人間の未来ーヘーゲル哲学と現代資本主義ー』ちくま新書、2009年2月
30. 見田宗介『社会学入門ー人間と社会の未来ー』岩波新書、2006年4月
31. 同・『著作集I・現代社会の理論』岩波書店、2011年11月
32. 見田宗介・大沢真幸『二千年紀の社会と思想』太田出版、2012年4月
33. 真木悠介『著作集III・自我の起源』岩波書店、2012年12月
34. 大森荘蔵『時間と自我』青土社、1992年3月
35. 河合隼雄・中沢新一『現代日本文化論1・私とは何か』岩波書店、1998年1月
36. 養老孟司『唯脳論』ちくま学芸文庫、1998年10月
37. 加藤周一『日本文化における時間と空間』岩波書店、2007年3月
38. 藤沢令夫『世界観と哲学の基本問題』岩波書店、1993年3月

39. 同・『「よく生きること」の哲学』岩波書店、1995年6月
40. 同・『著作集、III－「哲学の基本的課題と現実的課題」－』岩波書店、2000年12月
41. 同・『著作集、V－「ギリシャ哲学と現代」、「プラトンの哲学」－』岩波書店、2001年3月
42. 古東哲明『現代思想としてのギリシャ哲学』講談社、1998年4月
43. 大沢真幸『生権力の思想－事件から読みとく現代社会の転換－』ちくま新書、2013年2月
44. 藤田正勝『哲学のヒント』岩波新書、2013年2月
45. 梅原 猛『人類哲学序説』岩波文庫、2013年4月
46. 高木仁三郎『いま自然をどうみるか』白水社、2011年4月（1985年初版）
47. 磯崎行雄・丸山茂徳『生命と地球の歴史』岩波新書、1998年1月
48. 柳沢桂子『「いのち」とはなにか－生命科学への招待－』講談社学術文庫、2000年
49. 中村桂子『自己創出する生命－普遍と個の物語－』筑摩書房、2006年7月
50. 同・『「生きている」を考える』NTT出版、2010年9月
51. 同・『科学者が人間であること』岩波新書、2013年8月
52. 伊藤俊太郎『近代科学の源流』中央公論新社、2007年9月
53. 鷺田清一『じぶん－この不思議な存在－』講談社現代新書、1996年7月
54. 橋爪大三郎・大沢真幸・宮台真司『ふしぎなキリスト教』講談社現代新書、2012年
55. 岡崎勝世『科学VSキリスト教－世界史の転換－』講談社現代新書、2013年12月
56. 中村 元・三枝充恵『パウッダ（仏教）』講談社学術文庫、2009年12月
57. 井筒俊彦『コーランを読む』岩波書店、2013年2月
58. 松井孝典『我関わる、故に我あり－地球システム論と文明－』集英社新書、2012年2月
59. 清水 博『近代文明からの転回』晃洋書房、2013年8月
60. 井田徹治『生物多様性とは何か』岩波新書、2010年6月
61. 三木成夫『胎児の世界－人類の生命記録－』中公新書、1983年5月
62. マッド・リドレー『繁栄－明日を切り拓くための人類10億年史－』早川書房、2013年7月
63. 多田富雄『免疫の意味論』青土社、1993年4月
64. 同・『生命の意味論』新潮社、1997年4月
65. 同・『生命へのまなざし』青土社、2006年4月
66. 中沢新一『野生の科学』講談社、2012年8月
67. 中村弘基『生命誕生－地球史から読みとく新しい生命像－』講談社現代新書、2014年5月
68. 鈴木忠志『演劇とは何か』岩波新書、1988年7月
69. 前田英樹・安田登『からだの作る芸の思想－武術と能の対比－』大修館書店、2013年7月
70. 中村 哲『天共にあり』NHK出版、2013年11月
71. 大島堅一『再生可能エネルギーの政治経済学』東洋経済新報社、2010年3月
72. 井田徹治・末吉竹二郎『グリーン経済最前線』岩波新書、2012年5月
73. 脇阪紀行『欧州のエネルギーシフト』岩波新書、2012年6月
74. 藻谷浩介・NHK 広島取材班『里山資本主義』角川書店、2013年7月
75. 小原秀雄『現代ホモサピエンスの変貌』朝日選書、2000年8月
76. 橋本良明『メディアと日本人』岩波新書、2011年3月
77. 香山リカ『なぜ日本人は劣化したか』講談社現代新書、2007年4月
78. 中西新太郎・高山智樹『ノンエリート青年の社会空間』大月書店、2009年9月
79. 古市憲寿『絶望の国の幸福な若者たち』講談社、2011年9月
80. 尾関周二他編著『〈農〉と共生の思想－〈農〉の復権の哲学的探究－』農林統計出版、2011年9月
81. 小野塚知二・沼尻晃伸『大塚久雄『共同体の基礎理論』を読み直す』日本経済評論、2007年4月
82. 内山節『共同体の基礎理論－自然と人間の基層から－』農文協、2010年3月
83. 伊藤述史『市民社会とグローバリゼーション－国家論へ向けて－』御茶の水書房、2006年5月

84. 米沢富美子『人物で語る物理入門、上・下』岩波新書、2005年11月
85. 本川達雄『生物学的文明論』新潮社、2011年6月
86. 榊佳之『ヒトゲノム－解読から応用・人間理解へ－』岩波新書、2001年5月
87. 内井惣七『ダーウィンの思想－人と動物の間－』岩波新書、2009年8月
88. 安西祐一郎『心と脳－認知科学入門－』岩波新書、2011年9月
89. M.サンデル『完全な人間を目指さなくてもよい理由』ナカニシヤ出版、2010年11月
90. 岩佐茂・高田純『脱原発と工業文明の岐路』大月書店、2012年8月
91. 高橋昌一郎『理性の限界－不可能性・不確実性・不完全性－』講談社新書、2008年6月
92. 石橋克彦『大地動乱の時代－地震学者は警告する－』岩波新書、1994年8月
93. 海部宣男『世界を知る101冊－科学から何が見えるか－』岩波書店、2011年6月
94. 岩田靖夫『いま哲学とは何か』岩波新書、2008年6月
95. 鷲田清一『哲学の使い方』岩波新書、2014年9月
96. 河合隼雄・柳田邦男『心の深みへ』新潮文庫、平成25年3月
97. 森田邦久『量子力学の哲学』講談社、2011年9月
98. マンジット・クマール『量子革命－アインシュタインとボーア』新潮社、2013年3月
99. 大栗博司『強い力と弱い力』幻冬舎新書、2013年1月
100. 小山慶太『入門現代物理学』中公新書、2014年8月
101. 佐藤靖『NASA－宇宙開発の60年－』中公新書、2014年6月
102. 篠原健一『アメリカ自動車産業』中公新書、2014年7月
103. 矢作弘『縮小都市の挑戦』岩波新書、2014年11月
104. 堤未果『沈み行く＜大国＞アメリカ』集英社新書、2014年12月
105. 増田寛也『地方消滅』中公新書、2014年8月
106. 保母武彦『日本の農山村をどう再生するか』岩波書店、2013年10月
107. 金子勝・武本俊彦『儲かる農業論』集英社新書、2014年10月
108. 玉村豊男『千曲川ワインバレー－新しい農業への視点－』集英社新書、2013年3月
109. 水本邦彦『村・百姓達の近世』岩波新書、2015年2月
110. 大江正章『地域に希望あり－まち・人・仕事を創る－』岩波新書、2015年5月
111. 岡本裕一郎『フランス現代思想史－構造主義からデリダ以後へ－』中公新書、2015年1月
112. 細見和之『フランクフルト学派』中公新書、2015年3月
113. 富山太佳夫「歴史学とポストモダン」『思想』1994年4月、ゲイブリエル・M/・スピーゲル「歴史・歴史主義・中世テキストの社会」(同)
114. 野家啓一『物語の哲学』岩波現代文庫、2005年2月
115. スチュアート・シム『デリダと歴史の終わり』岩波書店、2006年10月
116. 仲正昌樹『日本の現代思想・ポストモダンとは何だったのか』NHKBooks、2006年11月
117. ジョージ・マイアソン『エコロジーとポストモダン思想の終焉』岩波書店、2007年7月
118. 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書、1992年1月
119. 河合隼雄『生と死の接点』岩波現代文庫、2009年9月
120. 河合隼雄『ユング心理学と仏教』岩波現代文庫、2010年1月
121. 河合隼雄『大人になることの難しさ』岩波現代文庫、2014年2月
122. 河合隼雄『青春の夢と遊び』岩波現代文庫、2014年4月
123. 本川達雄『生物多様性－「私」から考える進化・遺伝・生態系－』中公新書、2015年1月
124. 鬼頭昭雄『異常気象と地球温暖化－未来に何が待っているか－』岩波新書、2015年3月
125. 石井寛治『資本主義日本の歴史構造』東大出版会、2015年2月
126. 関下稔『米中政治経済論－グローバル資本主義の政治と経済－』御茶ノ水書房、2015年6月
127. 岡田進『ソ連論と未来社会論をめぐって、ロシアでの討論』ロゴス社、2015年6月